

湯気、道くさ

登場人物

横岡★……福島市に住む青年。二十代半ば

絹田……神奈川の葉山から来たおばあさん

加奈子……横岡の彼女。役なし

お姉さん☆……温泉街の近所のお姉さん。熱さに強い

ゆった★……女子にハブられている男の子

マコモ★……リーダー格の女の子

ちり★……地味な女の子

めい★……落ち着いたのある女の子

たく★……口数が少ない男の子

窪田★★★……銭湯に通うおじいさん

善治郎★★……銭湯に通うおじいさん。背中一面に刺青がある

〈訛りレベル〉 ☆…ほんのり訛る。抑揚が少ない。★…やや訛る。抑揚を押さえて読む。ちゃんにアクセント（お兄ちゃん）★★…訛る。助詞などに強いアクセント。★★★……強く訛る。だべえ、や、濁音が入る。

●飯坂温泉駅前～ギャラリー向日葵

絹田 「ああ、私、彼女のこと好きだったんじゃないかしらと思うの」

横岡 「……ああ」

絹田 「だって今になって、こうしてあなたに話そうって思うくらいだからね、心に残っていたのね」

横岡 「はい」

絹田 「それで何があったのかと言うとね、私がそうやってだんだんそういったことが上手くなってきた頃にね、あるイベントがあって、そんなに大きなものじゃないんですけど、でもまあちゃんとした場所を借りてね、やったのよ、銀座の」

横岡 「……」

絹田 「ね？」

横岡 「はい」

絹田 「でね、それが終わろうって時間にね、その人が来て、あら遊びに来てくれたのねって私、対応したんだけど、その人がね、ちょっとこっちで話しましょうって、人のいないほうにね、呼ぶのよ。でね、何を言うのかと思ったら、真剣な顔をしてね、「もうお互い、競い合うのはやめにしましょうよ」って！」

横岡 「え……」

絹田 「ね！ 私もう、びっくりしちゃって……」

横岡 「そんなこと、思うんですかね」

絹田 「ね。もういい加減こんな歳になりましたけど、まだまだ人ってわからないわあ、って」

横岡 「悔しかったんですかね、その人は」

絹田 「どうなのかしらね。私、だって、彼女のほうがやっぱりずっと上手だと思うのよ。そんな競うなんて、ね、考えたこともなかった」

横岡 「あ、と、ここじゃないですか、ギャラリー」

絹田 「あら、え、あらそう？ ここ？」

横岡 (スマホを見ながら)「もう同じブロックまでは来てるみたいです。この裏かな？」

絹田 「うふふふふ、私ったら若い人にね、こんなに頼って。ああ、良かった！ 自分じゃできないもの、それ。ね。辿りつけないわ」

横岡 (建物の中を覗く)

絹田 「今朝もね、ここの場所をなんとなく、なんとなくですよ、ホテルのロビーに置いてあるじゃない、パソコン。あれでなんとなく調べてはみたんだけど、土地勘もないのに、わかった気になって、ふふっ」

横岡 (ドアに手をかけたまま絹田を振り返って)

「え、地図ひらけたなら、なんで印刷しなかったんですか」

絹田 「だってほら、私がね、あんまり長く触ると、パソコンって壊れるでしょう？」

横岡 「……ふっ、あははははははははは！」

横岡／絹田 (ギャラリー向日葵に入る)

●ギャラリー向日葵～足湯

横岡／絹田 (ギャラリー向日葵を出る)

横岡 「あの一、すごいですね、ハッチングっていうの、線の数で濃淡をつくるんです

ね、初めてちゃんと見ました」

絹田 「そう？ 良かったわ、無理やり付き合わせていたら悪いと思って」

横岡 「いやいや、自分だけじゃ見ないですから、良かったです」

横岡 「でも、絵って言うから色が付いてるんだと思ってました、なんか、自動的に」

絹田 「そうでしょう。さっきの、ギャラリーの方も似たようなことおっしゃってて」

横岡 「あー、でしたね。特にご年配だと、趣味でやるにしても見るにしても色彩の方に向かう人が多いのに、線画のほうに来られるなんてって」

絹田 「ね。あの方もお若かったわよねえ。もー、こんなお婆あちゃんが来て、って、思ったかしらね、うふふふふ」

横岡 「いや、あれは、喜んでましたよ」

絹田 「ふふ」

横岡 「絹田さんが、あの人、何さんでしたっけ」

絹田 「今の人？ 青柳さんだったかしらね」

横岡 「青柳さん、でしたっけ。に、お子さんの話をしたじゃないですか。あれ、あのときすごい面白かった」

絹田 「そう！ ね！ うふふっ」

横岡 「うちの娘が、とか、息子が、とか言うから、青柳さん？ が、ちらっちら僕のほう見てくるんですよ。あ、これは来るかなあ、って思ってたらやっぱり……」

絹田 「ね。聞かれたわよねえ」

横岡 「ふふ。「いや僕たちさっきまで赤の他人だったんですけど」って、言ったらめっちゃくちゃびっくりして」

絹田 「うっふふふふ！」

(横岡の背中に手をかけて) 「「良い男だったからつい声をかけちゃったのよお」って。ね」

横岡 「いやあ」

絹田 「ね。ちょっとまだ、歩きましょうか。あなた大丈夫？ 他に予定がおあり？」

横岡 「ああ、いや、決まった予定は無かったです。まあ朝は、午後に座禅組みに行こうと思ってましたけど」

絹田 「座禅？ あらあら」

横岡 「あの、駅から十分くらい住宅街を歩いたところに、あ、飯坂じゃなくて福島駅のことですけど、禅宗の寺があつてなんか、そこで貼り紙を見つけて、毎月第一土曜日が坐

禅会だって、あって。今日、びっくりしますけど、その日じゃないですか」

絹田 「うふふふふ」

横岡 「ふふ、いや俺はびっくりして、これはやらないわけにいかないなあって」

絹田 「あらまあ、それは。午後？ 午後の何時から？ ここからだ……」

横岡 「いえ、もう行かなくていいんです。絹田さんに会ったので、予定かえました」

絹田 「あらやだ、まあ、ごめんなさいねえ、こんなおばあさんに付き合わせて……」

横岡 「いえいえ、コーヒーもごちそうになったし……」

絹田 「あらそう、禅宗？ に、興味があるの？」

横岡 「いや、そういうわけじゃ。なんとなく、良い機会かとも思っただけで」

絹田 「宗教について、どうお思い？」

横岡 「え？ ああ、……そうですね、……自分は、あらゆる宗教とは隣人の立ち位置を守ります。避けないけど、ちょっかひもかけない、見かけたら挨拶はする、みたいな、ですかね」

絹田 「こんなこと言うとな、しかもこんなお若い人に向かってね、絶対びっくりさせちゃうと思うけれど、宗教って、それでも良いものだったりするのよ」

横岡 「はあ」

絹田 「あのね、指針が立つでしょう。自分の気持ちがね、どんな気持ちの時でも、ハッキリとした方向を示してくれるものがあるのは、それは良いものですよ」

横岡 「そういうもんですか」

絹田 「ね、中には、それに取りすがって、もう全部がそれ！ みたいにね、なっちゃう方たちもいますけど」

横岡 「それは、そうですね」

絹田 「私なんか、もうしょげてしょげて、クソー！ って思うようなときでも、とりあえず教会に行くの。ね？ で、そうすると、やっぱりね、落ち着きます。ああ良かったー、って。人間そういうのが大事。それでかれこれ六十年」

横岡 「六十年……」

絹田 「今でも毎週通ってます」

横岡 「すごい……」

絹田 「夫なんか、そういうの全然なもんだから、教会に行くのに朝家を出ますでしょ、その時に私の顔をまじまじと見て、いい加減飽きないのか、なんて、ね、うふふふ、そんな

ですけど」

横岡 「旦那さん……は、どんな人なんですか？ 一緒に来たんですよね、車で。葉山から」

絹田 「ええ、そうなの。夫はもう競馬よ、競馬のために」

横岡 「ああ、今、やっていますよねでかいの」

絹田 「それだからね、ね、あなた私なんにも言いませんし福島に着いたらお互い好きに行動するんでかまいませんから、って言って、目の前に五千円。ね？ あげたの」

横岡 「ああ……」

絹田 「わかる？」

横岡 「運転手代……」

絹田 「そう！ うふふふふ」

横岡 「旦那さんはじゃあ、今、競馬ですねまさに」

絹田 「そうなの。ね、競馬なんて、ずっと趣味にしていますけど、ねえ、だって誰にも迷惑かけないし、お金だってね、すごい使うわけじゃないのよ。だから私は何にも言わないの」

横岡 「はあ」

絹田 「その代わりね、ほら、私は絵でしょう。うちの、ただでさえ狭いスペースを取ってね、やってるわけだから。向こうもそれに対して文句を言いません。お互い好きにやるの」

横岡 「ああ、いいですね」

絹田 「私たち、だから喧嘩したことないのよ」

横岡 「え、そうなんですか」

絹田 「喧嘩にならないのよ。私がこんなだから。あのね、ふふっ、以前にもね、あの人が何かのことですごく怒ってね、怒ってというか、もう癩癩ね」

横岡 「はい」

絹田 「で、「もういい！ 俺は出て行くからな！」って叫んで、出ていこうとしたのよ、玄関を。で、私は言うの、ね？ 「あなた、」って」

横岡 「……」

絹田 「「あなたね、およしなさいな。そんなことをしてもね、あなたが後で大変になるだけなんだから、よしておきなさいよ」って。でも夫はこう、感情がね、かあってなってるから、宣言通りに出て行くのよ。でもね、しばらくしてね、もうそれに飽きたんでしょうね、「なんで止めてくれなかったんだ」って言ってね、渋い顔して戻ってきたの」

横岡 「え、あはっ、……可愛いですね」

絹田 「ね？ 喧嘩にならないの」

横岡 「ああ」

絹田 「私はね、たぶん、結婚は自分の母のためにしたんだと思うの」

横岡 「……はあ」

絹田 「母にはね、それで、なんとか、子どもの時からお転婆でしたけど、まあそれでなんとか、人生まるく収めましたってことでね、納得してもらおう、というのがあって」

横岡 「へえ……」

絹田 「母はそうだったの。父のほうなんか、ねえ？ いいんです気にしなくて。だって、ふふふ、彼は子育てをまんま神様に丸投げしちゃうような人ですから」

横岡 「ああ。はは」

絹田 「私ね、さっきから思っていたんだけどね」

横岡 「はい」

絹田 「鉢植えが多いわね、ここは。飯坂の人はお花を育てるのが好きね」

横岡 「あー、あれじゃないでしょうか。温泉に客が来ないから、花育てるくらいしか楽しみが……」

絹田 「うふふふふ、そうね、そうなの、人がね、少ないでしょう。私たちかれこれ二時間以上歩いてるけど、ね？ すれ違ったの、さっきの氷屋さんのおじいさんくらいね」

横岡 「はあ」

絹田 「ね」

横岡 「ええ」

絹田 「なのに花の鉢は濡れてるのよね、ほら、ね、今お水をあげたばかりのようにね。人は見えなくても、そこにいるのよ」

横岡 「おばけみたいですね」

絹田 「うっふふふふ」

横岡 「あ、足湯がありますね」

絹田 「え？」

横岡 「あそこ」

絹田 「あらー、ほんと、湯けむり」

●足湯

絹田 「あらあら親切ね、タオル貸し出してくれるのね、ここ」
横岡 (足湯に手をかざして)「これは……、ムリかもですよ」
絹田 「え？」
横岡 (湯に手を入れる)「あっつ……！」
絹田 「あら」
横岡 (靴を脱いで湯の表面に足を触れさせる)「ムリムリ」
絹田 (靴を脱いで同様にする)
横岡 「いけます？」
絹田 「ほら、ね、私かかともつけるのが精一杯よ」
横岡 「ああ、もう汗が……」(服をさばいて服と肌の間に風を送る)
絹田 「あら、若い」
横岡 「ほとんど触ってるだけなのに、もう」
絹田 「熱いわねえ」
横岡 「これは埋めないとですね」
絹田 「え？」

お姉さん (とつぜん現れ、足湯のベンチにするりと腰掛ける)「熱い？」
横岡 「熱いです」
お姉さん (ためらいなく両足を足湯に浸ける)
「うーん。大丈夫、大丈夫。今日のはそんなに熱くない」
横岡／絹田 (顔を見合わせる)
横岡 「……熱くないですか」
お姉さん 「だいじょうぶ、ほら」
横岡 (くるぶしまで湯に浸け、やめる)「うーん」
絹田 「うふふふふ」
お姉さん 「だいじょうぶ、もう一回！」
横岡 「いや、ゆっくりで」
お姉さん 「そうお？」
(電話が鳴り、それを取る)「あ、はい。はいはい、はい」
(足を拭かずにぶらぶらとさせて水を切り、サンダルを突っかけて小走りで去る)

横岡 「……お姉さんいなくなったから、埋めても怒られないですよ」
(足湯のそばにある水場で桶に水を汲み、足湯に水を入れる。何度か繰り返す)

(手を湯に入れながら)「あんま変わらんなあ」

絹田 「あ、埋めるっていうのは水で温度を調節するっていうことなのね？」

横岡 「そうです。あ、言いませんか」

絹田 「そう、初めて。うふふふふふ」

横岡 (絹田の隣に座り直し、足の裏で湯の表面を撫でる)

「飯坂の人たちは熱いお湯に入るのがこの人間の意地、みたいに思ってますけど、町中が年寄りばっかでこんな温度のお湯に入ったら正直、どうなのかな、死にますよね」

絹田 「うっふふふふ」

横岡 「いやあ、冗談じゃなくて」

ゆった (足湯小屋に駆けてくる)

(横岡と絹田から少し離れたところにしゃがみ、手を湯の中に入れてばしゃばしゃとやる)

横岡／絹田 (あからさまにそれを見ている)

ゆった (見られていることに反抗するようにばしゃばしゃを続ける)

マコモ、ちり、めい、たく (駆けっこしながらやってくる)

ゆった (足を湯に浸けながら、マコモたちを黙って見ている)

マコモたち (足湯の前でぐるぐる円を描くように走る)

ゆった 「マコモちゃんたち全然オレのことなんか、気にしてないじゃん！」

マコモ (ちらっとゆったを見るが、気にしない)

マコモ 「ねえ！ 今のずるじゃない？」

ゆった 「ちりちゃんずるなんかしてないよ。オレ見てたもん」

マコモ 「……ねえー、ゆったは入ってこないでえー」

ゆった 「じゃあいいよマコモちゃんのばあちゃんに言うから」

マコモ (ゆったに近寄りながら)

「ねえー！ なんで男の子ってすぐそういうこと言うのお」

ゆった 「関係ないじゃん、男とか」

マコモ 「もういいよ、私たち浜野のおじさんちにフクロウ見せてもらいに行くから」

ゆった 「え、いま？」
マコモ 「うん」
ゆった 「たくも？」
マコモ 「そう」
たく 「……うん」
マコモ (駆け出す)
めい (横岡と絹田のほうを見る)
ちり／たく (続いて駆け出す)
ゆった 「めいちゃん」
めい (駆け出すタイミングを逃し、うろうろする)
ゆった 「ね、めいちゃんも行くの」
めい (ゆったのほうを見たり、マコモたちの駆けて行ったほうを見たり)
ゆった 「オレも行くからめいちゃんタオル取って。これ持ってて」
めい (ゆったから何かを受け取ってから、無料貸出のタオルを取ってきてゆったに渡す)
ゆった (足を拭く)
めい (歩き出す)
ゆった 「待って」(急いで靴を履く)
めい／ゆった (去る)

絹田 「ね、今日はお付き合いどうもありがとう」
横岡 「えっ？ あ、いえ」
絹田 「私、行くわね。ここでお別れしましょう」
横岡 「あ、そうなんですか？ 駅わかります？ 送らないで……」
絹田 「ええ、ええ、大丈夫よ、大丈夫」
横岡 「そうですか……」
絹田 「ええ、ありがとう。うふふふふ」
(足を拭いて靴を履く)

絹田 「それじゃあね、ごきげんよう。お元気でね」
横岡 「ああ、はい……」

横岡 (腕についた蚊を叩き、潰しそこねてまた叩く)

横岡 (服をばさばさとさばいて風を送りながら)「あつつ……」

●銭湯

横岡 (脱衣所に入り、手際よく服を脱いでロッカーへ)
(浴場に入り、軽くからだを流してから湯船に浸かる)

窪田 (脱衣所、浴場に入ってくる)

横岡 (湯船から軽く会釈する)

窪田 「……こんにちは」

横岡 「あ、こんにちは」

窪田 「ひとりがい」

(風呂いすを置き、からだを洗い始める)

横岡 「えっ？」

窪田 「先に誰もいながったか」

横岡 「はい」

窪田 「ああん。……寂しいなあ」

横岡 「はあ」

善治郎 (軽快に浴場に入ってくる)

窪田 (善治郎を見る)

善治郎 「おう、窪田さん！」

窪田 「お」

善治郎 (窪田の近くに風呂いすを置いて座る)

「こんにちは！」

窪田 「おっ」

善治郎 「窪田さん、背中流してやろうか？」

窪田 「おう」

善治郎 「今日はよ、これ持ってきたから」

(へちまを取り出す)

窪田 「うん」

善治郎 (へちまを湯で柔らかくし、窪田の後ろに座って背中をこする)

窪田 「……んああああ、気持ちいいなア」
善治郎 「だべえ」
窪田 「ああああ」
善治郎 「ここ、ここ気持ちいいだろ？」
窪田 「ああああ」
善治郎 「なあ！」

善治郎 (横岡の視線に気づき)「あんたもやってやるか？」
横岡 「えっ」
善治郎 「ほれ、な」
横岡 「え、じゃあ、……お願いします」
(湯船から上がり、窪田の隣に座る)
善治郎 (横岡の後ろについて、背中をこする)
横岡 「……!!!」
善治郎 「痛いかい」
横岡 「痛いです」
善治郎 「はっはっは」
(笑いながら背中全体をこすり、鎖骨の周辺もこする)
横岡 「ふっ……」
善治郎 「このへんもよおくこすつと、血行がよくなっから」
横岡 (痛みに耐えながら)「はい……」
窪田 「善さんよ」
善治郎 「んー？」
窪田 「終わったかい」
善治郎 「ああ、……よし、これでいいな。泡も残ってねえよ」
横岡 「ありがとうございます。つぎ、俺が……」
窪田 「じゃつぎ俺がやっでやっから」
吉岡 「え、あ」
善治郎 「おう、すまんね」(窪田と位置を替える)
窪田 「いようし、よし」(善治郎の背中をこすり始める)
吉岡 (善治郎の隣に座ったまま、いたずらに洗面器に湯を張る)
善治郎 「おおお、窪田さん強いなあ」
窪田 「んだべ」

善治郎 「おお」
横岡 「……」
善治郎 「ああー、いいなあ」
横岡 「……それ、すごいですね」
善治郎 「ん？」
横岡 「腕」
善治郎 「おう。ほら、……背中」
(窪田が善治郎の尻をこすってる際に横岡に背中を見せる)
横岡 「おお」
善治郎 「ケツまで」(尻を見せる)
窪田 「動くなってえ」
横岡 「すごい……」

横岡 「言われませんか、なんか。番台さんとかに」
善治郎 「ここはなんも言ってこねえよ、昔っからの付き合いだかんな」

善治郎 「あの一ほら、ああいうのはダメだ川の近くのさ、並んでるだろお、おっきなホテルとか」
横岡 「ああ」
善治郎 「ああいうところは入れないね、紙に書いて、でっかく「お断り！」って」
横岡 「ですよ」
善治郎 「窪田さん、もういいよありがとう」
窪田 「そうかい」
善治郎 「おう、すっきりした」
窪田 「だべえ」
窪田／善治郎 (湯船へ)
横岡 (ふたりが浸かっている様子を見ているが、湯船には戻らずそのまま脱衣所へ)
(からだを拭いて服を着、ベンチで扇風機の風を浴びる)

善治郎 「今日はいいねえ、からっとしてて」
窪田 「んだあ」
善治郎 「きのうまでは蒸して蒸してひどがったもんなア」
窪田 「明日んまあだ雨だってよ」

善治郎 「ありゃ！ ……晴れっといいけどなァ」
窪田 「明日かい」
善治郎 「明日」
窪田 「晴れたほうが人が出がげっかね」
善治郎 「選挙だもんねえ。若い人によ、出かけてもらわねえと」
窪田 「んだなあ」
善治郎 「清き一票を！」
窪田／善治郎 （湯船から上がりそれぞれの洗面用具を持って脱衣所へ）

善治郎 「涼しいかい」
横岡 「あ、はい」
善治郎 （扇風機に手をかざして）「おお、良いな」
窪田 「いやでも変わらねえよ、晴れだっで」
善治郎 「何がかい。あ、出かける出かけない変わんねえか」
窪田 「んだあ、変わんねえ」
善治郎 「そうかあ」
窪田 「出がげよう思ってっ人は何だっで出がげっけどよ、出がげねえ人は晴れだっで出がげねえよ」
善治郎 「……清き一票を。んなあ！」

●横岡の部屋

横岡 （電話をかける）
「加奈子？」
「ね、今日ね、ナンパされた。ナンパされてデートした」

横岡 （キッチンから飲み物を取って来ながら）
「へへ、え、違うよ。なんか、七十越えたおばあさん。でも美人だった。ふはは、違う違う。それだったら加奈子に言ったりしないもん、どうにかなりそうな相手なら、ふふっ、ちゃんと黙ってるかな、俺」

横岡 （飲み物を飲む）
「明日、選挙だね」

(テーブルを拭く)

「行かないの？ 住民票？ え、まだ地元にあんの？ うん、んー、そうだね、うん」

横岡 (立ち上がり、窓の外を見たり、本棚を見たり)

「え？ 全然。ぜんっぜん元気な人だったよ。足腰もしっかりしてたし肌も、そう、つやつや。あと二十年くらいは全然って感じで。けどなんでか、あの人見てたらなんか変な、人生がこう、流れていくのが見えた」

横岡 「しんみり？ してる？ ……そうかも」

横岡 (本棚から本を抜き取る)

「……いや、声聞けたから、もう別に、用ってほどのことは、うん。あ、……あのさ、じゃんけんしようよ」

(本を戻す)

「うん、今。ふ、いいじゃん、やろう。いくよ、いいから、せーの、出さなきゃ負けよ、さいしょは……ちよつと！ はは！ なに、さいしょはグーだろ」

(テーブルに戻る)

「ハイ、いい？ さいしょはグー、じゃんけん、パー！ あ、俺負け。……じゃあ加奈子の苗字ね」

横岡 (緊張気味に)「うん、だから俺は横岡やめて遠藤になる。遠藤光弘になる。……そういうこと」

横岡 (あまり元気がない声で)「……返事は今度でいいから」

横岡 (テーブルにうなだれる)

横岡 (しばらくスマホでメールか何かをしている)

横岡 (電話がかかってくる)

「……あ、もしもし莉沙？ うん、ひさしぶり」